



笑顔で手を振ってくれた子どもたち。今、国を豊かにできなければ、この子たちには手遅れになる

とユニセフの間で昨年合意が結ばれて、今年4月末までに、3000人の子ども兵全員が解放されたのです。これは、ユニセフが直接、現地の武装勢力と交渉して得た成果です。

今回、私はこの武装勢力の司令官と話をすることができました。司令官は、「われわれが子どもを兵士にしたのではない。子どもたちは行き場を失い、われわれについてきた。放っておいたら飢えてしまい、敵に出会えば攻撃される。だから保護したのだ」と強調しました。子どもたちに聞くと、実際に、身寄りがいない中で武装勢力への参加を呼び掛けられ、ついていくことも多かったようです。

食べていく方法がなければ

その司令官は、今回の子ども兵解放に当たって、ユニセフに感謝しているとも言っていました。「ユニセフは、子どもたちのためにリハビリセンターという受け皿を作り、解放後の子どもたちの生活に責任を持ってくれているから、安心して子どもたちを帰せる」と。

それを聞いて私は、現地の人たちと対話し、互いが納得できる解決方法を探すが、問題解決には大切なのだと感じました。

子ども兵の開放式典で、子どもたちは武器を引き渡し、軍服を脱いで、代わりにユニセフから新しい服や靴などをもらい、社会復帰センターに通います。センターで会った子が「ぼくはこれから、どうやって食べていけばいいの?」と聞いてきました。食べていくための知識も、道具もないこの子たちが、きちんと自立して食べていけるようにしなければいけません。

センターでは現在、600人以上の子どもが、毎日の食事があり、気兼ねなく友達と遊べる生活を心から味わっています。センターとは言っても、テントが5〜6個並ぶだけで、あとはみんな木陰で過ごすような場所ですが、それでも彼らがようやく取り戻した日



体調を壊して入院した子どもに付き添うお母さん。一家を支える彼女が働けないので、他の子どもたちは食べるものにも困っている

常です。

今回の訪問では、独立後も内戦に巻き込まれていない南部の州も訪問しました。中部以上に農業が盛んな地域で、小学校でも全員が制服を着て笑顔で通っている様子を見て、本当にうれしくなりました。また、ユニセフの支援で運営される小さな職業訓練校の卒業式に招かれ、若者たちが仕事の道具を手渡され、大臣から「私たちの誇りだ」と励まされている姿も見ました。平和があれば、こうして子どもたちが自立していける——彼らの姿は、大きな希望です。

△Profile▽
アグネス・チャン
香港生まれ。1972年に日本で歌手デビュー。以来、芸能活動の傍ら、教育学を学び、ボランティア活動にも積極的に取り組む。98年、日本ユニセフ協会大使に就任し、戦乱や貧困に苦しむ国の子どもたちの現状を伝えている。教育学博士。

南スーダンでは、子どもの10人に一人が5歳になる前に死んでしまします。平均寿命も50代半ばです。早く平和を取り戻して、戦争に使っているお金で教育やインフラを整えなければ、この子どもたちにとっては手遅れになってしまいます。

もともと、南スーダンでは部族の力が強く、独立前も長老が治める社会だったそうです。数多くの部族が協力して一つの国になれるほど、まとまっていなかったのでしょうか。

でも、いま内戦で互いに血を流している人たちも、かつては独立のために肩を並べて戦っていたのです。もう一度、今度は「平和」という目標に向かって力を合わせられないか。そして、この国の豊かさをすべての子どもたちにいき渡らせることができないか。

この国の平和のために私にもできることがあるはず。そんな思いで、今も、南スーダンのユニセフのスタッフと、情報やアイデアのやり取りを続けています。

Voice

23

豊かさ生かす平和を

日本ユニセフ協会大使

アグネス・チャン



ナイル川の水源にあたる南スーダンは、水が豊富で土地も豊かだ。川を渡る船は重要な交通手段でもある

一つを除いてすべてがある国

南スーダンは豊かな国です。農業のポテンシャルが高く、その気になれば自国はもちろん、慢性的な食糧不足に苦しむ他のアフリカ諸国に食糧を提供できるといわれるほどです。遊牧も盛んで、牛のミルクを飲んで育つ子どもも少なくありません。原油輸出で外貨収入もあります。

この国にはただ一つ、平和だけがありません。1955年からの60年間で、平和だったのはほんのわずかな時期だけです。

前回訪れた1999年はスーダン共和国からの独立をめぐる内戦の真っ只中で、空爆から逃れた人たちの難民キャンプを訪問しました。当時から、スーダンでは子ども兵が深刻な問題となっていて、私も実際に、小さい子どもが大人のような重装備で町を歩く姿を見掛けました。

あれから16年。南スーダンは3年前に独立し、油田からの利益を分かち合っって平和に暮らす約束でした。けれども、国内の部族同士で争いが始まったのです。

私は今年4月、再び南スーダンを訪れました。戦闘が起きている地域には入れませんでした。比較的安全な地域や難民キャンプを訪問し、現地の人々の生活を目に焼き付けてきました。南スーダンの内戦で家を追われた人々は、およそ200万人。約150万人が国内避難民として、約50万人が国境を越え難民として暮らしています。

大人の男性の多くは兵隊に取られてしまい、女性や子ども、お年寄りだけが残っているのです。働き手がないので、家に帰っても食べるものがありません。



リハビリセンターの子どもたちと。この子たちが笑顔で生きていくために、国全体の融和が必要だ

せん。配給を受けなければ、生きていけないのです。戦争で牛を失い、生活の糧がなくなってしまった人もたくさんいます。牛のミルクが大切な栄養補給源だった子どもたちの間にも、深刻な栄養不足が広がっています。

現地の考え踏まえた交渉を

けれども、良いニュースもありました。中部で活動していたある武装勢力